

4) 「臨床青年心理学研究」第Ⅳ報以来、懸案となっていた対人恐怖症の問題については、多くの文献にもあたってはきたが、われわれの症例に即して十分考察し、われわれの仮説を論証できるまでには至らなかった。ちなみに、われわれの仮説とは「自己の自主性・主体性が問われる場合・状況の忌避」として対人恐怖症の本態をみなそうとするものである。

思春期やせ症論の問題についてもまた同様であった。これについては、かつてこの欄でもふれたように、「生命的存在感の自明性の喪失」(木村敏)として、その本質がみきわめられるはずであると考えている。

以上の青年期病理と心理療法論以外に関心のあるテーマとしては、次のようなものがある。

2. 「女性性の内的受容について」 この主題の出発点は臨床場面におけるものであるが、実際の研究方向としては、それに限らず、女性一般にとってその女性性の内的なひきうけの様相がどのようにあるのかを問題にして

いきたいと考えている。今年度より数名の院生、研究生、および外部の心理臨床家の諸君と研究会をもっているところであり、現在、質問紙による調査を開始したばかりである。

3. 最近、性的障害の問題を含め夫婦関係の問題が主訴となるケースをあいついで受けもった。このような夫婦関係の関係性の主題にも、非常に興味深いものがあるのを、少しまとめることができればと思っている。

4. 「ライフ・サイクルと精神衛生」 ライフ・サイクルの各発達段階におけるその時どきの危機状況にあらわれてくる諸種の臨床像と具体的な症例を記述し、そこからむしろ普通の日常生活に焦点をあてて生の意味の深化を目指す方向での精神衛生的考察をふす形で、ライフ・オブ・スパンを描きだすような論述をなしたいと考えている。

(昭和58年8月31日記)

## 研究経過報告

二宮克美

### 1. 個人研究について

これまで「児童の道徳的判断の発達過程」について、関心を持ち研究を続けてきたわけであるが、今一つ明確な展望を持ち得ずにきている。この状況を開拓するため、再び内外の研究論文を整理しつつ読んでいる。この文献研究をしていく中で、新たな実験計画を立てようと努力しているところである。

なお、これまでの実験との関連で、児童が他者の意図をどう推測しているかについて検討を加えた。この結果の概要は、9月中旬の日本心理学会第47回大会で、「児童における意図の推測——行為者に対する好悪と行為の結果が意図の推測に及ぼす影響——」と題して発表する予定である。

昨年9月から今年8月までの間に、次の2つの論文が公刊された。

「児童の道徳的判断の発達に関する一研究——Gutkinの4段階説の発達同時性の検討——」教育心理学研究第30巻 282-286.

「児童の道徳的判断における自己の行為の判断と他者の行為の判断の比較」心理学研究 第54巻 123-126.

### 2. 共同研究について

久世敏雄教授を中心として研究を進めてきた青年の社会的態度に関する縦断的研究は、最終的な検討の段階に入ってきた。今年3月には、この縦断的調査から得られたデータの基礎的資料をまとめた資料集を作成した。現在、これまで報告してきた研究では検討されていなかった分析を行うとともに個人レベルでの社会的態度の発達過程の検討に力を注いでいる。今回の紀要では、前者についての研究成果をまとめ、「『中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究』の補足分析」として報告した。

### 3. その他

1984年版の「児童心理学の進歩」の中の「道徳性」の章を担当することになり、現在、国内の関連論文を収集している最中である。各県の教育研究所では、具体的な教育との関連で研究が進められていると思われるが、残念ながら、そのような論文は入手が難しく苦慮している。ここ数ヶ月は、この執筆に力を注ぐことになろう。

(昭和58年8月31日記)